

觸是也。地獄の近處に在る蒸湯と共に、別府温泉情緒の縣々たるものは海岸埠頭の砂湯である。

別府港埠頭の周圍の海岸砂地を一二尺掘れば下から温泉が湧き出て來るから半身を砂中に埋

めて、徐ろに蒸し温める事が出来る、即ち海水浴と温泉浴とが同時に出来る譯であつて、開瀾なる蒼空や碧海を眺めつゝ、悠然浴遊を肆にする原始的生活氣分は、一寸他では經驗の出來ぬ特殊の興趣である。

## 城崎温泉

### 内藤湖南

明治三十五年六月先生但馬に遊ぶ、沿泉紀行と題して、同年六月より朝日新聞紙上に現はれたるもの即是れ、今先生に乞ひて再録すといふ。

豊岡町に達せしは、(六月七日)午後七時頃なりき。豊岡は但馬第一の都會にして、柳行李の名産あり。出石よりの途上にて田畝の間に折々見たる、長四五尺に超えずして麻などの如く、茂生せる弱柳は、その原料として、栽培せらるゝと

ぞ、小場瀬氏に少憩すれば、この地の町長、原庄七君、こゝにて待ち合さる。原君はその藏幅を示さるべき豫定なりしも偶家に佛事ありて果さずとて、こゝに待合されしなりと。小場瀬氏も好事の人にて、その所藏なる、山陽、星巖、米山人などの書畫を示されたり、城崎よりは天野泰藏君、今朝より出迎へ居れりとて待合されたれば八時半頃同じく發す、豊岡は但馬の腹地なる小さき平原の中央にありて、これより圓山川

の沿岸を北へ下りて、一里ばかりも行けば、川の兩岸は連山に迫られて、道は其西なる阻を通ず、星光りに映じて見ゆる河幅は、高低の山影に亂されて、定かならねど頗る廣くして波立たずと見ゆ。城崎に着きしは夜十時を過ぎたり、西村挑洲君を東道とす。

○ 夜食をすまして先づ温泉に浴す、いと心地よし、城崎は今は町名となりたれども、原と温島村と名け、三百餘の小都會なり、圓山川に注ぐ溪流を挾みて、山間に市街を成し、人家櫛比せり、温泉は鶴の湯、陀曼羅湯、御所の湯、一二

りしを曼陀羅を修して、和げたるによりて名を得たりと法華靈場記にいへるよし、但馬考に引けり。たしかなる書に見えたるは、古今集能宣集、新後撰集等に皆但馬の温といふこと出でたれども、二方の温泉に紛らはしき節なきに非ず處の名のさだかに出でたるは、増鏡文永四年の頃、安嘉門院丹後の天橋立を御覽じて、それより但馬の城崎の温泉めしに下らせ給ひしことあり、こは御所の湯なりと蓄堂かたる。余が浴せしは一二の湯とて、西村氏の門前より、溪流を隔て、浴室あり、極めて清潔にして、温泉も亦透徹瑩朗あり。

○ の湯、柳湯、地藏湯等あり、鶴の湯は何れの頃にかありけん、鶴の鳥ありてその脚を傷つけたるが、谷へ下りて脚を浸し、日を経て創癒えて飛去りぬ、土人あやしと思ひて、その所を見れば温泉湧き出であり、之を温泉の始めとすと傳へ曼陀羅湯は養老元年道智上人一千日の間、八曼陀羅の法を修して温泉を祈り出すと縁起に見え享祿中、日眞師此湯甚熱くして足を入れがたか

○ 八日、朝の間は事なきまゝに挑洲が示されたる、温泉誌稿本、増補臥遊集稿本など拾ひ讀す二書ともに蓄堂の筆に成れるものなり。これにて温泉の湧出は、處々皆別にして、其性質にも多少の相違はあれど、主にアルカリ性にして、硫質分の至つて微かに、全く銀色を變せざる者も數槽あること、其の癩病、肺疾等二三種の外

は、大凡の病には著しき效驗あること、其效にや土人に長壽者多く、三四百戸の内にして、七十以上の老者、八十餘人あり、毎年養老會の擧ありて、その際は家格をも論せず、専ら齒を尙んで、擧村の人々之を請じて饗應する美風あること、昔より文人墨客のこの地に遊びし人多く柴野栗山、中井竹山、赤松滄洲、篠崎小竹、齋藤拙堂等、皆溫泉に痾を養ひ、光景に流連して題名吟咏も篇什甚だ繁く、又古方醫學の大家、後藤良山、香川修菴などは溫泉の效能を鼓吹し修菴が藥選の大著には海内第一の靈泉と稱せること、歌人にも藤原兼輔、吉田兼好の古きは更にも言はず、伴嵩溪、香川景樹、加茂直兄、鈴木重胤等皆其の諷詠を留めしこと、されば里人も自ら其の風に移りて、文雅の人少かちず、齋藤崎菴の詩畫近くは二三年前に早世したる三宅竹隱など、皆優に作家の域に入りしこと、其の風俗も間雅淳朴にして、時としては義に勇み、維新前の志士、こゝに暫らく跡を竄し、若くは同志を求めし者多く、木戸孝允、平野國臣など

の世を忍びし家、皆現存せること、物價の甚だ廉にして、海魚の極めて鮮に、浴客の費少くして、心靜かに體氣を養ふべきこと、播但線の新井驛より十四里程あれども、直行すれば六七時間にして達すべく、玄武洞の奇勝、瀬戸の海岸、皆一里内外に在り、大乘寺の應擧が名畫は半日の海程にして丹後の天橋立は一日の經程にして往き觀るべきことなど粗ぼ大略を頌したりかくて追々と來訪の郷紳に接し、猶かれこれと問ひ試みなどす。大阪にて識れる人なり、村瀬浩三君も此家に宿り居り、午時には我社神戸支局の中村喜市君にも偶然に落ち合ひぬ。

○ 午後には郷紳杉本、安田、井上諸君、並に菴堂と日和山といふに上る、こは湯島附近の水光山色一目して盡すべき所にて、圓山川は頗る洪流をなして、湯島の前にて、蘆葦青く茂り、中洲を形つくり、洲の東なるかなたは、山禱の參差たるにつれて、河流深く灣入し、灣と本流を隔てたる岬邊なる樂々浦民屋錯落として幾條の

五月幟白く水瀉の中に立てるが見ゆ、連峰北に走りて更に水を壓せるありたり、木立いと物古りたるは絹卷山とて式内絹卷神社あり、これより河水、海灣と連り、津居山の岡嶺茫絶、灣口を擁して、外は蒼茫たる日本海となる。湯島を圍める三面の山は、高低蜿蜒として、西南に閉

ちて、東北に開け、蒼翠鬱茂、烟嵐濃淡、温泉寺の堂塔其間に點綴し來日嶽の遠峰其上に超出す、我が立てる日和山は、其西面の連峰、將に盡きんとする所にありて、更に一蹶して、一峰北に突出し、以て東岸の連峰を河を挾さみ、山の更に西面に一小湖あり、山間に介まりて、鏡奩を開くが如く、此の方は何れに通ず、湖畔の挑島村は鷄犬の聲も相聞ゆべし、式内挑島神社こゝにありとぞ。すべて山巒河海、映帶繚繞して景致得もいはれず、余もこゝに至りて怡然として、其心光景と相融することを覺え、菴堂に語るらく、君がこちたき國自慢に耳駭かされし我は、實景に臨で失望せざるを得ざること多かりしも、只この光景は、其の言あげされしこ

とに負かずと、山上の小亭に少憩して山を下り市中を縦に過ぎて、鶴の湯のほとり、温泉寺藥師堂まで散歩して歸る。この夜余は中村君と同じく郷紳の二人が爲めに催せる向陽樓の宴會に招かる。

○

九日朝は二三郷紳及び菴堂と温泉寺に詣づ、前に記したる藥師堂の側より、杉木立の間なる石磴を曲折して登ること三町にして、觀音堂に達す、寺は温泉の開祖道智上人の開基と傳へらる、今は眞言宗となれり、住持の僧、數點の古畫を出し示さる。その中釋迦十六善神の畫像は六百年位も經たらんと見はれたるが、後の世の修補に古色を損せる所も少からず見ゆ。本尊十面觀音は寺の縁起に稽文の作にして、大和長谷寺の觀音と同木同體なりと見えたり、蓋し春日の佛師稽文會がことなるべし、やがて開扉を請ひ、燭に照して仔細に拜觀するに、その形相の腰より下つまりたる、顔面に一種の特徴ありて、刀法の疏宕なる、げに春日佛師の特色を表

はしたり。この佛像の現存するより考ふれば、開基の年代も大方は傳説に違はざるべし、四天王像、その他數十の毀損佛像も多、はその世の物と見えて、いと尊とし。堂後に多寶塔あり、塔中に大日像を安置す、室町以後の作と見ゆれど、其相好には面白き節あり、このわたり溪山廻合して、満月の空翠衣を沾すかと疑はれ、湯島の人家、峽中に鱗次し、眺め頗る佳し。後峰は東北に廻りて、木立深き嶺つゞきに大師詣の八十八箇所を設け、愛宕堂に至りて村の東端に出づるといふ。歸路に藥師堂側十王堂を觀たるが中に安置せる一觀音像、や、破損したれどよき作あり、堂の扁は黃蘗の獨立なりとぞ。

溫泉寺詣より歸れば、かねて約しつる玄武洞觀覽の舟の準備成りぬと報す、余と中村君とは例の郷紳數人と蓄堂(結城氏)とに導かれて、これに打乗る、歌妓二人その他酒肴を周旋するたれかれも同じく乗る、舟はかの溪流の下より出で、圓山川に入り南に向つて溯る、數町にして河に枕んで、いと荒れたる野店あり、こは柴博

士が命名したる半夜水明樓の名殘にて樓前に見ゆる石碑には博士の書せる、風雲詠郷山吐月、濯纓歌罷、水揚瀾の一聯を刻せりとぞ。この原本は今挑洲が家に藏せらる、當時は風流冷客、紅燈綠酒の興時として絶ゆることなかりしも、今は敗壁被簾、復た昔日に非ずと臥遊集に見えたり。溯ること一里餘、兩岸の山色、取次に眸中に入り來り、横披の畫卷を看るが若し。一行が命せし一漁艘は本船と先になり後になりて時に水候を見定めては網を打つ、水烟さつと立ちて間もなく銀鱗の網に従ひて上るは快よし。蘆葦いと茂りて、舩を掠むる洲渚の間より、東岸につきて上ること數十歩、突として玄武洞の前に出づ、洞は舊と石山といひしを、柴博士今の名をつけたるよし。山骨皆徑一尺二三寸乃至一尺五六寸、厚さ五六寸乃至七八寸なる黒き不等邊の六稜形の石より成り、其の縦に異なるは只石造の家の柱などに似て、其斜に横はれるは廠中に藏せられたる巨材とも看るべく、洞中に座して仰げば、一大蜂窠中に在るが若く、磊落

參差墜ちんと欲して墜ちず、眞に奇觀なり、石自ら材を爲して斧鑿を煩はさず、鐵挺を以て之を打てば、自ら折裂して墜來り、直ちに斃とし磴とし、礎とし、碑として用ふべきを以て、多年剝り出したる跡、窾發として巨洞を爲せるなり。泉、石間より漏れて、洞中に瀦せるは、清冽鑑みるべく、洞前に懸りては、水簾となりて紛飛す、石色若潤、苔蘚半ば蝕す、洞前に一茶店ありて、遊者の憩息に供す。玄武洞三大字を題せる自然の石柱は今、半ば埋もれたり。

玄武洞を觀畢りて舟に歸り、流に従て下り、瀬戸に至る、湯島の下流一里許りに在り、津居山と一橋を以て相毘連す、こゝに至る途上にして絹卷山は東岸に聳ゆ、善堂云く絹卷山の山骨も略ぼ玄武洞に似て、但其排列のさま稍や異なるのみ、絹卷の名はその石狀より由來し、澤庵禪師の歌に

羨ましこの里人はたてよこに織りなから見る  
絹卷のまゝ

とありと。今は夏木立のしげみに立ちかくれて

石の狀も見えず、錦を衣て綱を尙へたる者が、意ふに豊岡以南なる、圓山川東岸の連山は大抵この石質の地層より形成せる者にて、そのたま／＼山骨を露出せる處、即この絶奇の神工をもらせるなるべし。絹卷神社は、三代實録に見えて、今絹卷山の西岸に在り、其の對岸なる小島村に式内大社海神社ありといふ。但馬海直の祖なる天火明命を祀れる者とは栗田博士等の考なり、絹卷山以外は即ち津居山灣にして、津居山は西岸よりこの灣を擁せる山の内面に漁家をつらね、絹卷山より東北に開けたる地は、氣比村より此に曲りて、津居山の對岸にて更に灣口を囊括し、河水、海水と混融して一となる、瀬戸と津居山との間は、この大なる灣の一小枝西に向て深く灣入して之を隔てたり。

舟を捨て、歩し、この小灣に沿ひて瀬戸村を過ぐ、灣の西盡頭は、奇巖怪石嵯峨磊砢としてその間潮水巖間を縫ふて、僅に外海に通ず、こゝは昔灣口、巖石に閉ぢられたりしを、天日槍之を鑿開して、圓内の洪水を治めしとの傳説あり

り、出石郡畑村なる福田氏はその鍛工の後なりといへり。瀬口に瀬戸の日和山あり、山を繞りて、山徑を西に登れば、忽ちにして外海の岸に出づ、海岸は巖石出入して、海潮吞吐し、雪を噴き珠を飛ばし、其末汪々たる積水、天と際なし、氣象雄濶、滿洲女直、鞭を投じて絶つべきを思ふ、岸上の一亭に少憩して西刀神社に詣づ式内の小社にして、大己貴少彥名二神を祀り、上古洪水逆行せる時、二神倉稻魂命と此に到り流水を疏通し温泉を設け、樹藝を教へたりとは日本史神祇志が但馬<sup>フクカマ</sup>二方温泉記、神社考傳、但馬一覽記等に據りて記す所なるが、その所傳のいたくこの地方に傳ふる天日槍の事に似たるはいかなる故にかあらん。現に湯島の曼陀羅湯は天日槍の發見にして、湯島の四所神社は、日槍の從者四人を祀るとは、出石社由緒書に見ゆ、さればこの地方の水土底平の功に關しては、大己貴と、天日槍との二説あるが如し。余は後者を取るべし。日槍が成功のさまで大ならざることは、養父、氣多二郡の大己貴が占領に歸せし

による、養父郡の妙見山は杉の良材を出す所あるが、その村の必ず出雲大社の建築に用ひらるゝ例なるにても推し測らるゝ所なるも、海岸占領はたしかに成功したる者なるべく、小島村の海神社天火明命を祀るに徴しても、この地方が高天原種族の勢力國たりしことは知ることを得べし。これより丹後若狹越前より北陸地方の諸大社は多く天神の社にするは、先づ但馬のこの根據あるに由りしなるべく、其の往々地祇の舊社と相錯綜せるは、天孫種の徑略は出雲の根據地を舍きて、先づ但馬以東に着手せられたる跡を見るべき者にして、因幡以西には、穗日、夷島等、大己貴に服從せる天孫族を除く外、天神の社なきより見ても、この伊馬國は天孫種と出雲族との勢力分界點たり、隨て日槍が經營の艱難なりしことも推しはからる、思ふに瀬戸の鑿開も洪水を治するが爲めにはあらで、新羅交通の船舶に出入の便を與ふる爲にやありけん。西刀神社より歸路に一老松ありて、その下に小祠雅成親王が承久の亂後、この國に流され給ひて

海天霽わたる日に會へば、そこより天帝後鳥羽上皇の謫所なる隱岐の島を水天髻髯の際に涙ながらに拜し給ひし遺跡と傳へたり。

瀬戸の大江龜松君を訪ひて、君が所藏の書畫幅、古筆の手鑑などを展觀して、舟に上る頃は日全く暮れぬ、舟中に燈を點じて行々小宴を張る、郷紳の多くは多藝にして、美しき聲にて俗曲なごうたふ口つき、素人らしからず、酒肴の世話に乗りたる一老婦は、城崎名所など、この地にて古くより傳はれる曲を歌ふ。好箇の竹枝詞にして、いと面白かりしも、余が記憶し得ざりしは遺憾なり、湯島に近づく頃、舟中の絃歌湧くが若し、蓄堂曰く、これこの地の風俗にてこの景氣よき合圖にて家々より迎への小者など、溪岸に驅けつくるなりと。歸宿せしは夜の十時頃なりけん。

○ 十日昨日は海岸も霧深く今日の天候氣つかはれたりしに、思の外にいとよく霽れたる、温泉の效能にやあらん盜汗も昨夜は止みたり、余は

蓄堂に大乘寺行を促したれば、舟の發するは夜半を可とする由にて、午後は郷紳の催されたる挾練樓の小會に臨む、樓の名は梅辻春樵の命せし所とて其書せる匾、今もあり、數々の書畫を集めて示さる、優れたりご見ゆるも少からず、中には田村麿の古文書といひ、蒲生氏郷が、前田利家依需書之といふ所の畫に關白秀吉の贊したるなど失笑すべき者なきにあらず、余も郷紳の求むるまゝに遠慮なく惡筆を揮ふ。挑島神社の古文書九通あり、正安より天文頃までのものにて中二通は寫本なり、多くは山名氏の領主時代に係れり、神社の由來、當時徳政の事、漁業等に關する事などには倔強なる史料たるべし。

○ 大乘寺は舊美含郡の森といへる村にありて城崎より陸路は七里なれども其間に山多くして、車を道せず、されば遊觀の人は、皆海穩かなる日を待ちて、漁舟を賃するを常とす、余等の一行、郷紳十許名も、他の大阪あたりの浴客の一行と、二艘の漁舟を備ひ、夜の十二時頃に湯島

を離る、漁舟には屋根なく、晴れたる夜は霧深く、寒かるべければとて、毛布など數多用意す舟は瀬戸の北灣に入り、天日槍が鑿開せりといふ、嶋巖の間より外海に出づ、昨の天と際なかりし海面には、漁籜遠近、數十里に亙りて、炬火を列ねたらんが若く、極めて壯觀なり、其遠きは十數里の海面に出づるもありとぞ、是たしかに北海奇勝の一に數へつべし、舟の海潮に觸るゝ際は、海水青白き燐光を發して盤上に碎玉を走らすといはんも、以て其の美しさを形容するに足らず、是も水行の一奇觀なり、海岸の勝景は夜黒うして見え分かず、曙近くなりて、一行多く眠を催し、余も假寢みたるが、着たる毛布露に濕りて心地悪し、色を辨する頃より、海岸の巖石、怪詭争ひ峙ちて、應接するに遑なきばかり奇なりしが、間もなく香住灣に着きて船より上り奥西某といへる家にて朝食を取る、城崎より水程凡そ六時間を費しぬ。香住より田間の大道に徑し、歩いて森に到る、十町許りもあるべし、大乘寺は山に據りて西に面し、石を疊み

て壁とし、階とし、結構頗る壯なり、そもこの寺の有名なるは、其開基の行基菩薩なるにもよらず、天平の古なるにもよらずして、其の圓山應舉の畫に富めるより應舉寺の名さへつきたり傳ふる所によれば、寺の中興開山、密英上人、應舉を幼時に知り、銀三貫目を與へて其志を成さしめたるを以て、應舉之を徳とし、寺の再興の舉ありしとき、其外人及び吳春等と、爲に其の襖、屏風、軸物等を畫きて、上人の舊誼に報じたりと、今の住職長谷部寶應師は又維新後の紊亂せる寺政を整理し以て舊觀を保持せりといふ。

一行は先づ客室に請せられ、茶菓を饗せらるこは狗兒の間と名けられ、山本守禮が狗兒嬉戯のさまを襖に畫けるなり、應瑞が鯉の間、貞章が藤の間といふを過ぎて、次に來るは、上段つき三十餘疊敷の應舉が山水の間なり、三面を圍める金地の袂襦に水墨の山水をかきて結構の雄大なるは古法眼元信にも劣らず、筆致は穩健にして弩張の跡なけれども、氣力充實して些の懈

處處を見ず、大作といふべし、小さき地袋の戸には金地に挑、葡萄、枇杷、橙、を極彩色にて畫きたるは、畫格、元明を軼過して、南宋畫院の名手を彷彿せり、更に次の十二疊半は同じ筆の芭蕉の間とて、郭汾陽王が芭蕉樹邊に諸孫と嬉遊するさまを畫き、金地に娟麗溫雅なる賦彩を用ひ、群兒の相貌など錢舜舉に近しといふべし、更に一折して次に接せる二十五疊の大房は孔雀の間とて同じ筆の松に孔雀の墨畫なりこは古永徳などに想ひ競べてはや、跌宕の趣には乏しき心地すれど、その細密緊勁は又一種の特色たるべし、この三房の畫は既に國寶に列せられて、かゝる避地に無上の光榮を與へしとぞその他吳春がかきたる禿山の間はその筆に頗る蕪村の風格を帶び、農業の間は純乎たる四條風の輕俊なる筆致を示めしたり、山本守禮、龜岡規禮が合作せる使者の間は其の人馬は二趙より來り、美人は仇英を規倣せしと見え、其の山水樓閣に四條風の率筆を用ひざりせば、更に一段の品致ありけんものと思はれたり、樓上の鴨

の間は源琦が筆にして欄間の群蝶は應受並に夜色に善く、前者はその師の明畫を學べるあたりより來り轉薄ならず後者は清人の勝境なり、之につゞける猿の間は、雪が群猿を海濤危巖の間に畫きしにて、例の奔放肆横、俊氣無雙といふべし、其屏風軸物は一々評するに違あらず、唯だ最も眼につきたるは、應舉が柳下狗子の幅、其の歿年に畫ける鐘馗の大幅なごなり、同筆の十六羅漢の屏風一雙なる物のよしなれども、筆の賦彩共に妙ならざるが若し。觀畢りて別舟の一行は先づ辭し去り、余等の一行は長谷部氏が心をこめられたる午餐の饗を受け更に師が居室なる竹の間に應舉が墨竹を觀、別堂なる觀音像行基作と傳へらるゝものを拜しやがて、を辭して出でぬ、香住村長泰君と、森の福本君とが一行の爲めに便宜を與へられたるは厚く謝する所なり。

再び香住の奥西氏に少憩して午後三時頃舟に乘り、來りし時に比すればやゝ浪ありて、舟の動搖すれば藥研形なる漁舟の底の座り心地あし

く、日さへ照りそひて、熱苦し、舟は海岸を距  
れて捷路を東に進みたれば、曩に見たる危岩怪  
石も、多くは目に親しまず、沖の浦の烟波に望  
みて、一時間も進みしと覺ゆる頃より、波は又  
和ぎて、鮫の宮も見えすべく清める海水には  
水母の泳ぐなぞ見えて可笑しけれども日光のま  
すく熱きに一行には心地損ひたるものあり、  
心地よげに假寝むもありてとりくくなり、竹野  
濱は水程の半より、少東に偏りたる所にありて  
式内鷹野神社はこの地に在り、神坐志には但馬  
國造竹野君等の祖、彦坐王を祀ると定めたり、  
このあたり岬角兀として海中に突き出でたるを  
加島山といふ、臥遊集に櫻花を以て聞ゆ、其山  
たる壁立千仞、嶺巖秀拔樹皆岩石を攫んで海上  
に欵立ち舟を泛べて其下を廻れば、則ち花の爛  
漫、波濤の激瀾と相映じ相射ると記せり、花は  
其の季節にあらねば詮なきも、岩石の音はよく  
其實景を道ひ盡せりといふべし、山に柴博士の  
題名碑ありて、

左右睨隱岐佐度及三越於肘腋、望滿州女直於

城崎温泉

雲天之外、把酒浩然、有曠世之懷。  
の句ありとぞ、之より東、海岸の峽間に宇日、  
田久日の二漁村を望む、平氏の遺民なりと、著  
堂語る瀬戸に近づく半里許の程より海岸巉巖は  
骨氣蒼老其奇秀を極め、樹石横斜、龍拏虎躡、  
形容すべきこと難し、舟子に命じて海中の奇礁  
を縫て進む、たゞ馬遠、夏珪が畫幀裏に在て行  
くが若し、水簾あり、山間より直ちに海上に懸  
る、小車瀑といふ、又御待の瀧ともいふは、天  
日槍が瀬戸鑿開の時會てこゝにも試みて中廢せ  
し所と傳へらる、凡そこの瀬戸津居山より香住  
に至る海岸は、其岩石波濤を觀るだけにてても、  
一遊の價値はたしかに在り、況んや來路に漁籜  
を觀、着しては名書を觀、去路にこの勝景を併  
せ得るをや、余は後の遊者に必ずこの一路舟行  
を慇懃する者なり。

舟子は三人にして其一は十三ばかりの少年な  
り、艫を操ること未だ習はず、屢其手を失ふ、  
而も舉止快捷其勞を意とせず、舟津居山を過ぐ  
時、其夥伴を見れば輒ち、湯島へ往て、湯に入

て、餽頭買うて、散財して來るぞとて、得意げなり、城崎につきしは八時過ぎなりき。

十一日には來訪の郷紳に接して一日をくらしつ、晩に近き頃、又温泉寺の藥師堂に詣で、堂中に藏められたる湯島四所明神の神像を拜す彫刻はいとあら／＼しきものなれども、時代は古かるべし、山門のほとりにて、杜鵑のなきて過ぐるを見たり、極樂寺といふに過ぎりて、稻嶺蕭白などの畫ける襖褙を見る、例の疎宕なる墨畫なり、兆殿司が畫ける開山畫像といふ者あ

れど、縑素殘破して辨すべからず、曼陀羅湯の前をすぎ、御所湯といふに浴して歸る、明日は余も蓄堂と同じく迂路より天橋立を觀て歸途につかんことに定め、中村君もその用事をはりて直ちに神戸に歸らんこと、定まりぬれば、この夜は主人の挑洲、その細君、妹のきみなど、皆いで、忠實にもてなざる、又郷紳の求めらるゝまゝに燭をかゝげて便面に惡札をふるふこと十餘通なり。

## 紀州山間の温泉

### 山本勝市

一、湯峰温泉と川湯温泉 場所は紀州熊野の山奥、行政區域でいへば和歌山縣東牟婁郡のうちで、四村大字湯峰と請川村川湯とにある。山一つを距てた隣同志、前者は硫黄泉、後者は炭

酸泉だ。古く國史に見えた熊野の湯でありながら今は不使なので却つて世に知られて居ないが稀な良い温泉で、無色透明、その質、その量及び其熱に於て、ひとり四國の道後に比すべくで